

まちテク

土沢商店街の小さな日常の展示
2013年11月～12月
さいとうよしとも・柳田亮

ぷちギャラリー



#2

浅與建設の入り口に置かれた柳田亮の作品写真

「まちテクぷちギャラリー」 #2
2013年11月12月の展示
柳田亮・さいとうよしとむ
花巻市東和町土沢商店街 20カ所
発行日 2014年1月25日
発行 東和町土沢商店会連絡会

企画 toncacci atelier
花巻市東和町田瀬 14-120
代表 菅沼緑
roqu@me.com
<http://www.arttsuchizawa.com/>
<http://machikado.urdr.weblife.me/>



この小冊子は「まちテクぷちギャラリー」の記録です



「土沢商店街」は岩手県花巻市東和町の中心市街地です。2年に1回「アート@つちざわ」というアートプロジェクトが行われていて、その間を埋めるものとして「まちテクぶちギャラリー」が2014年9月から始まりました。

1回の展示は2か月間で、同時に2人の作家から作品の写真を提供してもらい、1カ所に3枚ずつを10カ所に展示することで、この計画は進んでいます。

展示の様子

この回では 20 力所の展示でした。
展示の様子を写した写真の下にあるキャ
プションは丸数字が地図の番号です。次が
店の名前。そして作者の名前が示されてい
ます。

前回は台の箱に塗った色が白かったため
に、あまり目立ちませんでしたので、今度
は黄色く塗りました。アクリルの箱に入れ
て展示していますので写真を撮る時に、景
色が映り込んでしまい見づらいものがあり
ますが、これは展示の様子ということでご
容赦ください。

20 力所の展示の場所は結構生活感に溢れ
る場所で、町の様子の風景でもあります。
生活の空間に割り込んで展示をさせても
らっていて、その中の生活の空間が主役で
す。

さいとうよしとも君は東和町浮田の出身、
岩手大学の特設美術家を卒業して現在は仙
台で暮らしながら写真や映像を使って制作
をしています。

一方、柳田君はアート @ つちざわの常連
で、いつも「土沢けんちく新聞」という手
書きの新聞を会期中に描いては発行すると
いうことをしています。

その新聞に描かれているスケッチがとて
も軽妙で、彼の目と手の確かさにはいつも
私も感心しているのです。ここに展示され
たものは写真ですが、実際の作品も小さい
サイズのキャンバスに描かれていて、きっと
自分の体に馴染んだ大きさなのだろうと
思っていますが、いつか大きな作品に出会
うのを楽しみにしています。



① 多田理容店 さいとうよしとも



② 浅与建設 柳田亮



③ 佐々長建店 柳田亮



④ 小原歯科 柳田亮



⑤ 旧商工会 さいとうよしとも



⑥ 佐々長醸造 さいとうよしとも



⑨ 金星 柳田亮



⑩ 平沢宅 さいとうよしとも



⑦ キクヤ薬局 さいとうよしとも



⑧ 笹寅商店 さいとうよしとも



⑪ 福泉 さいとうよしとも



⑫ 岡田新聞店 さいとうよしとも



⑬ ヤマザキ さいとうよしとも



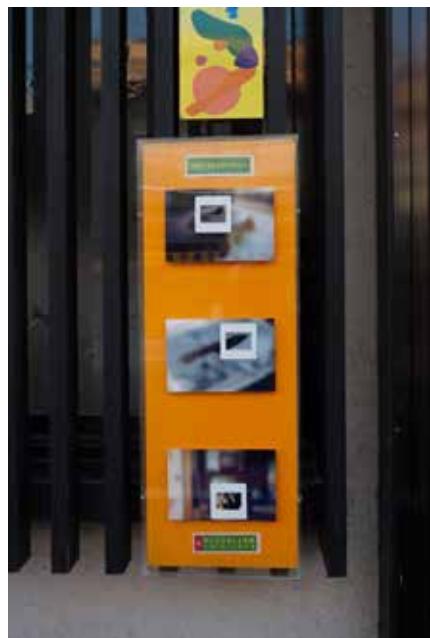
⑭ 菅原電気 柳田亮



⑯ 鈴木時計店 柳田亮



⑰ 手仕事屋 柳田亮



⑮ 小田島宅 さいとうよしとも



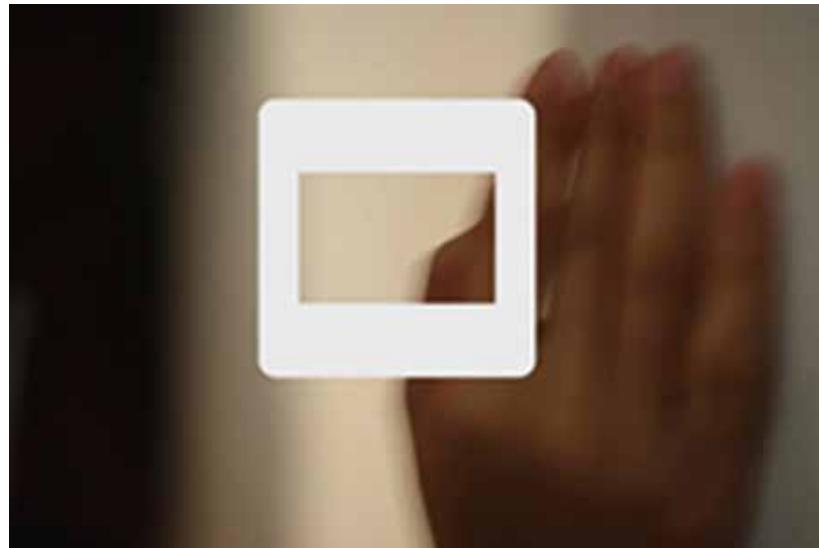
⑯ 吾助堂 柳田亮



⑰ 中西金物店 柳田亮



⑲ 小桜屋 柳田亮



さいとうよしとむ



さいとうよしとむ

感情の表現

感情の表現が言葉の上でだけじゃないのは当たり前のことです。そんなわかりきったようなことをあえて今回の「感想」のテーマにしてみようと思いました。

ことに、さいとう君の作品は、自分が暮らしている仙台の町や、生まれ育った東和町の思いでをいつもあからさまに、むき出しにしている作品だよなと、思うのです。それは一体何なのだろう。

私が初めてさいとう君の作品を観たのは、アート@つちざわの展示でした。もと風呂屋だった「松ノ湯」跡の会場で、浴室にプロジェクターを置いて脱衣所との仕切りのガラスの引き戸に、仙台のだと思います、町の喧騒をフラッシュのように矢継ぎ早なカット割りでめまぐるしく移り変わる町の景色が身の置き所のなさと、いつの間にか入れ替わる。田舎の田園風景がゆっくりと流れ、大きな蒼い空になったかと思うとこれまた

フラッシュ、フラッシュ。

その青い空と草木を穏やかに揺らせる田園の風景も、東和町の思いでの風景だったのだろうと私は思っています。さいとう君のふるさとは東和町の浮田地区にあって、自分が送ってきた過去の歴史に載っかっている現在を検証しているように見えるのです。

そうした、さいとう君が送ってくれた今回の作品の写真を観て、驚きました。あらかじめ作品の概要については彼から説明をされていましたが、こういうやり方もあったのかと痛快な感じすら受けたからです。

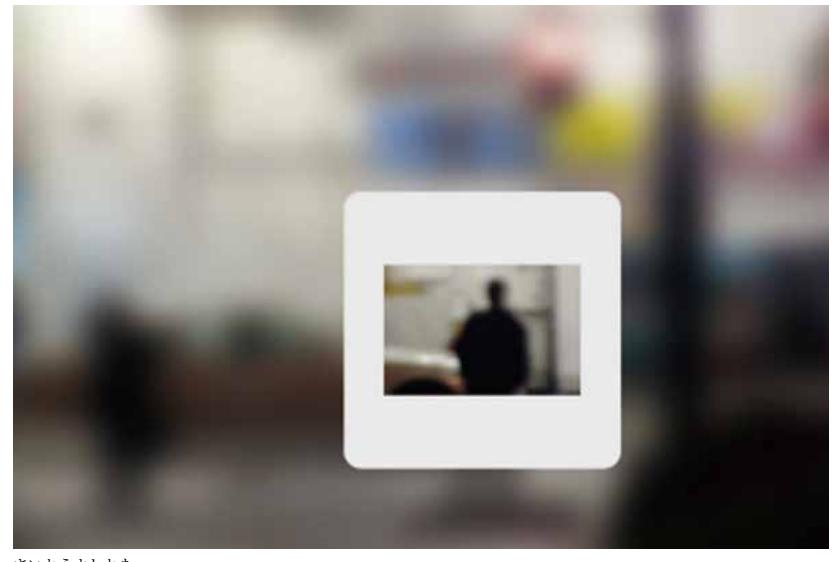
ここに掲載している写真を見れば分かると思いますが、ハガキ大の写真の中にスライドフィルムに使う実際のマウントが貼ってあって、その内側だけフォーカスがきちんと合っています。その周りの全体はピントがずれていてホワーンと形はなんとなく見えるけれど、漠然としたイメージがこちら側に向かって伝わっては来るけれど、説得力を持って、その形やイメージが語りかけてくるほどではない。

だけどの写真の一画に貼られたスライドマウントの中にある写真が、抑制的に、しかもはっきりと「愛情」を伝えていると思ったのです。

全体がピンぼけになっているそのほんの一部分だけがはっきりとカタチや様子を伝え



さいとうよしとも



さいとうよしとも

ている。しかもピンぼけとシャープなカタチの間には境界線のようにスライドマウントが画面をかなりの割合でふさいでしまっている。逆にそのことがここが一番のポイントですよ。とはっきり教えてくれています。

このように、覆い隠すことで逆に注意を喚起する、これはむしろ古典的な手法だと言つてもいいくらいのやり方ですが、それをあえてこうして実行するにはそれだけの目的と構成力が要求されることだ、といえば「あたりまえ」のことだよといわれそうな気もしますけれどね。

そのあたりまえである種、古典的な手法でさいとう君が訴えたかったこととはなんなのだろう？

今つい、「訴えたかったこと」と書いてしまいましたが、表現したりされたりすることがいつでも「訴えたいこと」とイコールではないので、あまり適切な言葉ではなかつたかもしれません。

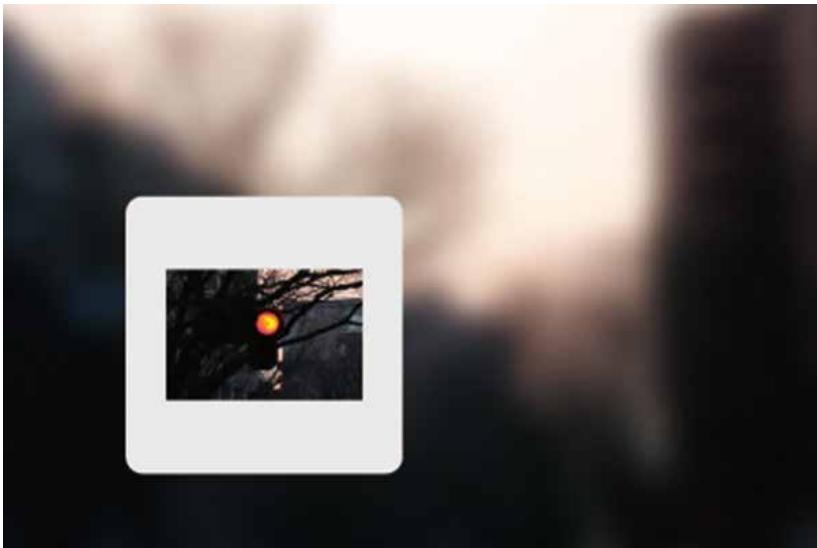
芸術の表現というのは、間接的な表現でなくてはならないと、私はずっと考えていて、「赤いリンゴ」という言葉が「赤いリンゴ」を表現するものではないはずだと思ってい

ます。

そういう直接的な表現は説明ではあっても、基本的には芸術ではないと思うのです。(例外はもちろんいつもあります) 安直な言い方をすれば「赤いリンゴ」以外の言葉を使って「赤いリンゴ」を表現することが芸術の本来の役目ではないだろうかという思いがするのです。だから「赤いリンゴ」といったり、書いた場合、そこに立ち現れるのは、赤いリンゴ以外の事柄なのだろうと思うのです。

たとえば、それはそれを言ったり、描いた人が積み重ねてきた時間の歴史から垣間見える「その人」の影なのかもしれません。しばしば、作品から受ける印象と作者がまるでイコールのような印象を持つ場合がありますが、それも少し違うように思うのです。影のように立ち現れる「人」と、その影に写る「人」の影とが同じになるわけはありません。

つまり、私たちはイメージという影をつねに追いかけていて、その影を通してものの姿を想像しているのだと思うのです。さいとう君のこの写真の中に写っている風景や、子どもの手や指が自分のふるさとと重ねて愛情を見ているのかもしれません。暮らして



さいとうよしとも

いるまちと、そこに生きようとしている自分と家族の姿を重ねているのだろうと思うのです。これらの写真に写っている形や姿を見せることが本当の目的ではなくて、この被写体に向かられている、さいとう君の眼差しこそが作品であり、表現そのものなのだと思います。

で、そうしたさいとう君の眼差しは、ある意味、一般的な社会観であり家族感として見ることもできると思います。その感覚と感情を芸術として成り立たせるものがあるとすればそれは一体何なのだろうか。それは、「赤いリンゴ」だと思うのです。

さいとう君自身の眼差しを支えるバックボーンがどのように現れるのか、安直な言い方を許してもらえば、それが強い眼差しであったり、或いはひたすら優しいのか。

表現の方法として、写真や映像の使い方の第1議的な面においては、申し分のない表現だと思うし、完成度もスキのないレベルで、いつも見る側をワクワクさせてくれるさいとう君です。

それに加えて、愛の感情を支える想いが見えるもの以上にヒシヒシと、細波のように、立ち現れることを楽しみにしています。赤いリンゴのむこうに感じる何かしら、それは愛の感情のように溢れて感じられてしまうものなのかもしれない。感情の表現のように形じゃない



さいとうよしとも

気持ちの表れるよりどころみたいな、以心伝心が芸術にはつねについて回るのだと思います。前回のアート @ つちざわで観た「UKITA」はとてもワクワクさせられたし、釘付けになりました。

え?それで説明になっているのかよ。そういう説明で、私の感想を締めくくることがいいのか、心許ない感じがしますが今のところ私にはそこまでしか話ができません。恥ずかしながら。

(菅沼縁)



「絵を描く人」2004年(F6) キャンバス、油絵の具 柳田亮

癖

なくて七癖、あれば百、てつか。それも岡目八目、自分じゃ気がつかないっていうのが定番です。

たぶん柳田君も子どもの頃から絵を描くのが好きで、ずっとその好きがやめられなかったクチなんだろうな。あの葛飾北斎は富岳百景の後書きに「己齢3歳の頃よりもの形を写す癖ありて」と書いていますが、こういう癖というのは一生抜けないみたいです。癖っていうと、好きとか嫌いとかいうレベルじゃなくて黙っていても気がつくと描いていた。というような感じで、頭より体の方が先に動いてしまうということだと思います。それでも人によってその度合いも千差万別でしょうが、柳田君の癖レベルがどのくらいかは私にはかるよしもありません。だからこれは私の勝手な当て推量、当てずっぽう。にしても当たらずとも遠からずでしょう。

一般に「才能がある」とか言い表すことがあります、その才能というのも多分この癖のことではないかなと思うことがあります。おそらく、才能というのは記憶力の



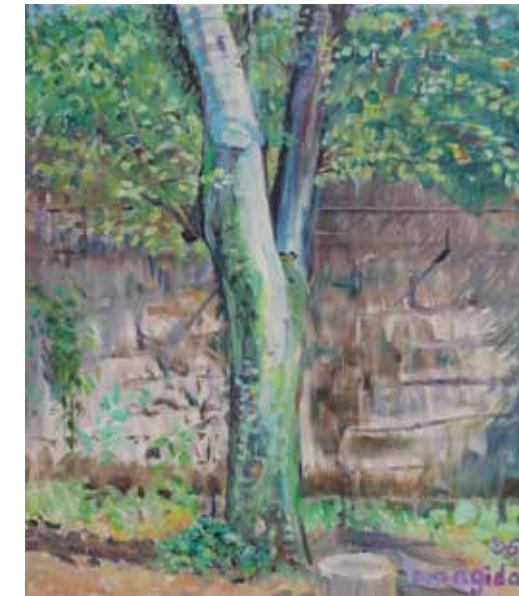
「落下」2004年(F10) キャンバス・油絵の具 柳田亮

ことではないかと思います。ある特定の事柄に対しての記憶力が突出していて、その能力も突出するということだと思います。筋肉を動かすことの記憶力が優れれば、運動神経がいい、ということになります。音に対する記憶がよく、鋭く反応するようであれば音感がいい、歌がうまい。形や色に対するものであれば、絵がうまくなる（この絵がうまいという言葉がくせ者だけ）。テレビで藤田嗣治のこと話しているのを聞いていたら、「藤田さんは道を歩いていて向こうからやってくる女の人たちが着ている服の柄から色から、すれ違った時には全部正確に覚えていました」というようなことを話していましたが、やはりレオナルド・フィジタは才能豊かな天才だったのだろうと思いました。柳田君の形に対する記憶力をあらわすエピソードを私は知りませんが、エピソードではなくその絵から多分これは絵描き癖だろうと思うことはしきりとありました。

例えば上にある2枚の絵ですが、左のページの絵は誰かが公園かどこかで絵を描いているところに出くわして、かなり早く描いたのではないかなと思わせるような感じで



「帰り途」2012年(F6)キャンバス・油絵の具 柳田亮



「木と塀」2006年(F10)キャンバス・油絵の具 柳田亮

す。本当のところはともかく、出くわした光景にインスピレーションを受けてサッと描いてしまう。右の絵も頭に浮かんだイメージをすぐに描いてしまいたいのも絵を描きたいという欲求の強さをあらわしているような気がしますがどうでしょう。

それに対して、このページの絵、「帰り途」という絵はその場所で描いたというより、家に戻つていつも通うこの道の風景が気になつていて、そこにある建物を思い出しながら構成的に描いたという感じがします。それと対照的に右のページにある絵はその場所でじっくり景色を眺めて時間をかけて描いています。真ん中にある木の幹の表情を細かく表しているし、後ろの石垣に写っている影や色も丁寧に描かれてそれなりに時間もかけているのでしょうか。「帰り途」の方は大きく画面を構成して細かい描写を切り捨てて四角をいくつも並べてあり、その真ん中を電信柱が真っ二つに切り裂く。結構力強い構成です。そして右の絵も四角い石垣だか、塀の形の周りに緑色の葉が覆い被さっているけれど、大きく見ればこれも四角です。その四角をやはり真ん中で木が半分に分けている構図は同じような感覚ですが、表現方法はかなり細かくて写実的です。二つの絵のど

ちらもなんだかとても力強い。

その力強さが表現の裏側の芯なのではないでしょうか。

絵を描きたいという欲求、絵を描いていれば安心できるというような癖に、直接絵に現れる形よりも、その裏側に隠れている強い芯のようなもの、それが作品をたらしめる「何か」ではないでしょうか。

残念なのは、絵の大きさが小さいということです。多分柳田君としては自分の体に馴染んだ大きさで、手を動かすストロークや眼に入る大きさが自分の感覚に合っているから、この大きさになっているのかもしれません。それも癖。



「となりの坂」2012年(F3)キャンバス・油絵の具 柳田亮